



Data

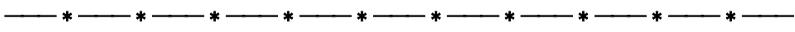
監督: ダグ・リーマン
 脚本: ゲイリー・スピネリ
 出演: トム・クルーズ/ドナルド・グリーソン/サラ・ライト官
 /ジェシー・プレモンス/マウリシオ・メヒア/アレハンドロ・エッダ/ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ/E・ロジャー・ミッチェル/ローラ・カーク/ベニート・マルティネス/ジェイマ・メイズ

👁️👁️ みどころ

ハリウッドには「BASED OF TRUE STORY」の映画が多い。『トランポ ハリウッドに最も嫌われた男』（15年）や『ニュートン ナイト 自由の旗をかかげた男』（16年）がそうだし、本作もそうだ。他方、「歴史に名を残す男」には、「長生き型」と「早死に型」があるが、ハリリー・シールはどっち？

CIAの極秘任務でフライトを！そんな依頼に飛びついた男はパナマ、ニカラグア、コロンビアを結んで麻薬や銃の密輸に精を出したが、これはアメリカのため？それとも己の儲けのため？

トム・クルーズが演じると主人公はカッコ良いが、ホントは金の使い道も知らない、憐れな私利私欲だけの男？そんな風に見えるから、「アメリカをはめた男」の副題は何とも空虚。「歴史に名を残す男」の価値の有無を含めて、本作の楽しさと虚しさをしっかり噛みしめたい。



■□■イントロダクションは？ストーリーは？■□■

本作の「INTRODUCTION」と「STORY」については、公式ホームページにあるので、参照してもらいたい。

■□■ハリリー・シールズの世界は？■□■

本作のハリリー・シールとCIA(?)との関係、そして、「ハリリー・シール ヒストリー」については、公式ホームページにあるので参照してもらいたい。

また、公式ホームページには、コロンビアの麻薬王バプロ・エスコバルが君臨するメデジン・カルテルの解説があるので見てもらいたい。さらに、本作のチラシによれば、USAとパナマ、ニカラグアそしてコロンビアとの位置関係もわかりやすく解説されている。

■この男もアメリカの歴史に残る男？いやいやホントは？■

10月15日に第19回共産党大会を終えた中国は、新たに習近平国家主席が自らの名前を冠した政治理念「習近平の新時代の中国の特色ある社会主義思想」を掲げた。そもそも中国は何千年の歴史を誇る国だが、アメリカは独立戦争（1775年～1783年）による建国からわずか230年の国。しかし、「西部開拓史」を代表としてダイナミックに動いてきたアメリカには、あっと驚く男たちの実話が多く、そのため、「BASED OF TRUE STORY」の面白い映画が多い。『トランゴ ハリウッドに最も嫌われた男』（15年）（『シネマルーム38』123頁参照）で見たトランボたちや、『ニュートン・ナイト 自由の旗をかかげた男』（16年）（『シネマルーム39』63頁参照）で見たニュートンがそう。しかして、本作に見る「アメリカをはめた男」バリー・シールとは・・・？

写真で見る実物のバリー・シールはとてつもなくハンサムとは言えないが、本作でバリー・シールを演じるのは天下のハンサム男トム・クルーズ。したがって、その行動はハチャメチャでその場しのぎだが、妻を愛するやさしい夫や子供を愛するやさしい父親としての甲斐甲斐しい姿をはじめとして、男の魅力に満ち溢れている。もともと、CIAのエージェント（？）からの誘いでやり始めたCIAの極秘作戦のパイロットとしての役割は麻薬や銃の運び屋だから、この男はその危険性に気づかないの・・・？誰でもそう思うはずだが、それは社会派問題提起作ならではの心配で、本作のようなチョー娯楽作品ではそういう難しい話は横に置き、バリー・シールのぶっ飛びぶりとその荒稼ぎぶりに注目！

■ホントにCIA？なぜこんなにボロ儲けを？■

私はコロンビアの麻薬王エスコバルの名前を『エスコバル 楽園の掟』（15年）（『シネマルーム37』未掲載）ではじめて知ったが、バリー・シールはこのエスコバルともお友達でビジネスパートナーだったそうだからビックリ！バリー・シールの任務はアメリカとパナマ、コロンビア等を結んで麻薬や銃を運ぶことだが、それをCIAのエージェントとしてやっているのなら、その儲けはすべてCIAに吸い取られるはず。ところが、なぜか本作ではそれがほとんどバリー・シールの稼ぎになっているから、アレレ・・・。そのため、彼の儲けは近時のITバブルの長者をはるかに超えるものだったらしい。そんなことを考えると彼の雇い主はホントにCIA？それが疑わしくなってくるが、当の本人は何とも無邪気だから、アレレ・・・？

ちなみに、資金洗浄（マネーロンダリング）も追っつかず、銀行の金庫も満杯になったため、バリー・シールはやむなく倉庫や土の中にトランクに詰めた現金を隠していたが、

これを見ていると、お金はあまり沢山稼いでも意味のないことがよくわかる。もつとも、そんな状況下では、息子にしっかり金の使い道を教えなければとんでもない放蕩息子、バカ息子になってしまう可能性が高いが、案の定それは本作でも・・・。

■□■逮捕はいつ？その罪は？アレシ復活・・・？■□■

こんなにド派手にボロ儲けできるC I Aの仕事があるはずがないのは当然だから、数年後のバリー・シールの逮捕は当然。バリー・シールの逮捕のために地元警察が長い間頑張ってきたのは当然だが、その逮捕の現場にはF B I等の様々な（縦割りの）捜査機関が重なり合ってきたから、その優劣は？管轄争いは？それはともかく、これだけド派手な犯罪を重ねればバリー・シールが激罰に処せられるのは必至だが、おっとどっこい、アメリカには「司法取引」という面白い制度がある。F B I（C I A？）にとっても、ここまでパナマやコロンビアの反米勢力と「信頼関係」を築いてきたバリー・シールの存在は貴重なわけだ。

てなわけで、そんな「司法取引」を持ちかけるとバリー・シールは喜色満面ですそれに同意し、以降の「活動」を再開することに。しかし、それってこれまでに以上に命の危険があるのでは・・・？

■□■長生き型と早死に型。この男はどっち？■□■

歴史に名を残す男には、豊臣秀吉や徳川家康、伊藤博文など稀に長生きする男もいるが、どちらかという織田信長や石田三成、そして、坂本龍馬のように動乱の中で若死してしまう者の方が多い。つまり、長生き型と早死に型の2通りがあるわけだが、さて、バリー・シールはどっち？

バリー・シールにとっては、せつかく巨万の富を築き、麻薬王と呼ばれるようになったのに、その時点で逮捕されてしまったのは想定外。しかし、貯め込んだ金はすべて没収されたわけではなさそうだから、「司法取引」以降の暮らしも十分安泰。しかし、「これまでは俺たちの仲間」として麻薬や武器の密輸に協力してきたバリー・シールが、今度はF B IやC I Aのために働いていることがわかって・・・？

韓国映画『暗殺』（15年）はタイトル通り、朝鮮総督の司令官と親日派の売国奴を暗殺のターゲットにした面白い映画だった（『シネマルーム38』176頁参照）が、エスコバルをはじめ多くのヤバイ「旧友たち」から暗殺のターゲットとされたバリー・シールの運命はいかに・・・？

■□■歴史に名を残す男の価値とは？この男にその価値が？■□■

『ニュートンナイト 自由をかかげた男』に描かれたニュートンは、若い時にジョージア自由州のために献身的なリーダーとして働いたが、南北戦争後はあまり名を残す功績は

ない。これを見れば「歴史に名を残す」には、長生き型より早死に型の方が有利なようだ。その意味で、バリー・シールは若くして暗殺されてしまったから、その名は長くアメリカの歴史に残っているのかというと、必ずしもそうではない。それは、本作を見ればわかるように、あくまでジョーンズ自由州のために働いたニュートンに対してバリー・シールはアメリカのためという大義名分がなく、すべて私利私欲、つまり金儲けのためにのみ働いていたためだ。彼は家族を愛していたし、そのための努力を続けていたから、家庭人としても良い男。さらに、仕事が拡大していくとうまく仲間を募りながら円満にその規模を拡大していったから、企業経営者としての能力もピカイチ。しかし、彼の頭の中には、「アメリカのため」「国民のため」という公の意識が全くなかったことは明白だ。

したがって、本作の邦題にはわざわざ「アメリカをはめた男」という副題がつけられているが、これはナンセンス。つまり、彼にはアメリカをはめようとする意図など全くなく、ただ目の前のエサにつられて右往左往をただけなのだ。もちろん、そんな男がいてもいいが、そんな男バリー・シールはいくら早死しても、「歴史に名を残す男」としての価値がないことは明らかだ。もっとも、そんな男をあえてハリウッドが取り上げ、しかもトム・クルーズが主演したことには大いに意義があるので、それには拍手！

2017（平成29）年10月26日記